

横山 IS 相談会報告

タイトル

分断された海と森をつなぎ直し流域圏の豊かな 自然・社会文化を取り戻す-共有できる経験・価値を軸にした協働方法-

日時：2022年7月20日（水）10時から12時

形態：オンライン

参加者：鬼頭秀一・東京大学名誉教授（環境倫理学）

帯谷博明・甲南大学（環境社会学）

横山勝英・プロジェクトリーダー

松田素二・プログラムディレクター

冒頭に資料に基づいて30分程度、プロジェクトの目的や位置付けなどの概括的説明があった。三陸地域における二つの事例、有明地域における二つの事例を通して、森—川—海の連関の視点から、現代社会がそれを切断したうえで社会や人々の分断をもたらしている現状に対して、それをつなぎ合わせることで地域社会の再生と環境の保全を図ることを目指すプロジェクトの方向と方法について報告があった。鍵となる視点として、「意図的な無関心層」に向き合うこと、正義や理念の対立を回避しながら共有できるシンボルやアイコンを設定しながら状況を変化させていく視点があげられた。これに対して、鬼頭さんから有明海沿岸調査の経験などに基づいて、以下3点の注文がなされた。

1 地域の人々の多様で錯綜した思いや意識を汲み取らないと、平板な対立図式にからみとられる。それを避けるためには、自然科学・工学的視点に加えて、地域に密着して半ばレジレント型の調査を行なっている曖昧で不定形な（綺麗に理論化されない）視点が必要で、そうした視点を持つ研究者を加える必要があるのではないか。

2 地域の現状を厚みを持って理解するためには、歴史軸、とりわけ明治以降の近代史の中で、地域、環境、生業がどのような変容をたどって今日の状態に至ったかという視点が必要なのではないか。

3 正義や理念の空中戦を回避してアクセスや記憶を共有できるアイコン（例えば干潟の生き物やうなぎ）を手がかりに、人々の意識を喚起していく際、現実の今日の生態系の中で、それが外部からの強力な（科学的・政治経済的）介入なしに実現できるかどうかの検討が十分ではなかったように思われる。

4 正義や理念を回避することは、ある面で、不毛な対立を固定化させ分断を深化させることを予防する効果はあるが、反面、これから先の地域のあるべき姿についての議論自体を封殺してしまうとしたら、ビジョンを持った未来を描けなくなるので、その辺りのバランスをどうとるのかについては仕掛けが必要ではないか。

つづいて、東北の調査経験をもとに帯谷さんから下記3点のコメントがなされました。

1 研究者が、例えば干潟の再生あるいは非大型構造物的自然統御など地元の生活環境、生態環境と密接に関わる事案に、提案や知識の提示あるいは対話などのアクションを通して関与するタイプの調査は、近年では超学際、社会実装として認知され、社会調査の領域でもアクション oriented リサーチ、介入型研究として位置付けられている。こうしたタイプの調査手法をどのように認識するかについては、誰のために行っているのか、どのような価値規範に基づいて行っているのか、対立する多様なステークホルダーとどのような関係を結ぶのか、など基本的に検討しておくべき課題があるので、それについての検討を行っておいたほうが良い（正解花井）。

2 プロジェクトのタイトルが「海と森のつなぎ直し」となっているが、東北の事例はその通りだが、有明海の事例では森の姿が前面に登場しないので、何らかの説明が必要ではないか

3 東北の二つの現場、有明の二つの現場をつないで、プロジェクト全体の統一した流れを作るためには、各事例をつなぐ論理があったほうがわかりやすいが、その点が十分主張されていない気がした。

4 鬼頭さんが指摘したように、各事例のコミュニティに入り込んでフィールド調査をしている社会学、民俗学、地理学、人類学などの研究者をチームに参加させることで、より視野の厚みが出るのではないか

以上のコメントや注文に対して、横山さんからも補足的説明があり、率直な意見交換がつづいた。